

令和6年度第1次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. すべての解答用紙に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
4. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 次の文章を読み、傍線部（『自分が言いたいこと』は何かという、自分自身への興味）『自分自身が蔵している謎』への興味）について、(1)それは具体的にどのようなものか、また、(2)子どもたちがそれを持つために学校教育においてできることとできないことは何か、(1)(2)それぞれについてあなたの考えを述べなさい。（横書き 八〇〇字以内）

子どもたちに向かって、「自分の言いたいことをきちんとことばにしなさい」という教育方法に対して、私はいささか疑問を抱いています。

どうしてそういう教育方法に疑問があるかという点、「自分の言いたいことをきちんとことばにしなさい」というときには、「きちんとことばにする」という要請の方が優先して、「これはほんとうに『自分の言いたいこと』だろうか？」という自問に割く時間がその分だけ削られてしまうからです。

大学に入ってきたばかりの一年生たちに、自由なテーマでエッセイを書かせると、あまりおもしろいものに出会いません。というか、ほとんど「非常につまらない」ものばかりです。

型にはまっているからです。

「小論文の書き方」みたいなものをたぶん高校の現国の授業や予備校で習ってきて、そこで習得してきた技法なんでしょう。論題について「具体例を挙げ」、それについての「一般的見解」を紹介し、ついで、「私なりのちよつと違う視点からのコメント」を付して、最後にどうでもいいような「結論」（「日本はこのままでいいのだろうか？」、「若い人たちにも少し考えて欲しいものである」、「メディアの論調に無批判に従うのはいかがなものか」など、どこにでも使える決まり文句——「根岸の里の佐び住まい」みたいな——が十個くらいあります）で締め、という定型のとおり、学生たちはエッセイを書いてきます。

こういうものを何十編も読まされていると、読んでいる方は重い徒労感にさいなまれてきます。

そういう定型なことばづかい、ストックフレーズの乱れ打ちというのは、一種の暴力として機能するからです。私のような、劫を経た教師でも、そういうものを浴び続けると、それなりに息が詰まってきて、胸苦しくなってくるのです。「お願いだから、どこかで扉を開けてくれ」といううめき声が漏れてくるのです。

「扉」というのは「訂正への扉」のことです。つまり誰かが何かを言うと、「それって、『こういうこと？』」という問い返しがあつて、それに対して「いや、そうじゃなくて」というふうな「訂正」があつて……というふうな受け渡しが始まるきっかけになる、コミュニケーションの「解錠」のことです。

錠が解けて、扉が開き、外の空気が流れ込んでくる感じ……そういうファクターがエッセイの中にあると、読む方はなんとなく救われた気分になります。中空をにらんで、必死になって暗記したフレーズを読み上げている人ではなくて、こちらをまつすぐみつめて、ことばを手探りしながら話している人を前にしたような気分になれるのです。

入学してきたばかりの大学一年生で、そういう語り方ができる人はほんとうにわずかしきません。でも、できる人は、できる。どうしてできるのかというと、そういう人は「自分が言いたいこと」は何かという、自分自身への興味、もつと踏み込んで言えば、「自分自身が蔵している謎」への興味がまさっているからです。そのことの方が「きちんと定型通りに書くこと」より優先している。

その人は、たぶん自分のことがまだ「よくわからない」んです。自分が何を考えているのか、よくわからない。よくわからないから、言いよどむ。口ごもる。つかえる。ためらう。言い直す。

ことばと思いがうまく合致しない。

その「言いよどみ」や「口ごもり」がそのまま表現された文章は、「いい文章」であるかどうかは別として、少なくとも「扉が開いた」文章である可能性は高いと思います。

錯綜しているけれど、どこかに自然な律動がある。息せき切って走ってきた人の息づかいが、乱れているけれども、それでも生命の必然にかなっているのと同じです。

そういう文章は論理的ではないけれど、どこかにたしかな条理が通っている。

（出典）内田樹『先生はえらい』（ちくまプリマー新書、二〇〇五年）（一部改変）